

高島藤樹会

(題字は、竹脇雲卿先生によるものです)

発行

NPO法人 高島藤樹会

〒520-1224

滋賀県高島市安曇川町上小川1225-1

藤樹書院・良知館内

電話・FAX 0740 (32) 4156

日本の誇り・郷土の誇り

中江藤樹

藤樹人間学塾塾長 田中 清行

今年二月に草津市で行われた滋賀大学主催の「先人学研究フォーラム」で、「中江藤樹」の話をさせていただき、好評をいただきました。その中から藤樹人間学塾の話をさせていただきます。

平成二十四年から「藤樹の著書を読んでその思想を学び、自分の頭で考え、良いと思ったことは実践する」ことを目的に藤樹人間学塾を始めました。

最初に取り組んだのが『翁問答』です。集まった同志で読み始めました。

『翁問答』は、藤樹三十四歳頃の著作で、その思想は、身分の上下を越えた平等思想に特徴があり、士・農・工・商の四民にまで広く浸透しました。「われも人も、人間のかたちあるほどのものはみな兄弟なり」。

青年が問う。「人は、生涯で、どの



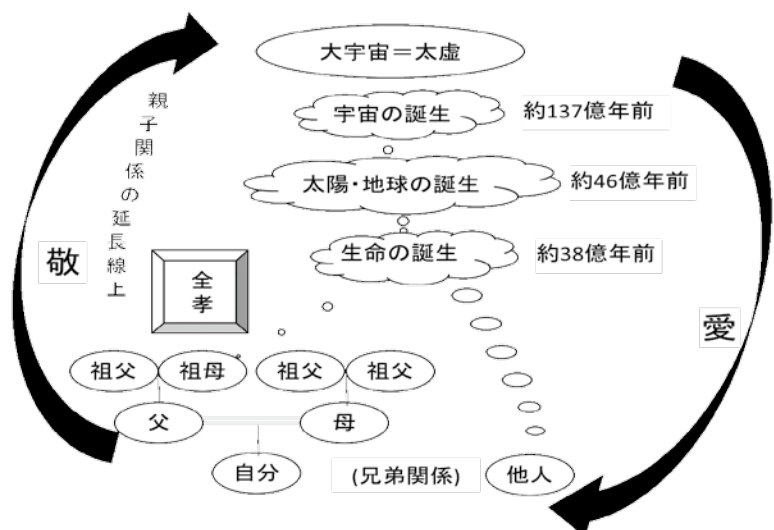
ような道を選択して生き方とするのがよろしいでしょうか。

師が答える。「至徳要道という生得の宝を活かし心に守って五倫の道を行うべきである。そして、この宝を求めて学ぶことが儒者の学問であり、この教えは貴賤男女の違いなく本心ある人ならば誰もが実践できる道である」。

平成二十七年からは『大学解』をテキストに読み進めました。「大学の道は明德を明らかにするに在り。民に親しむに在り。至善に止まるに在り」。これは「良知に至る」と同じです。

平成二十八年からは『孝経啓蒙』を読み、議論を進めています。「孝は徳の本なり。教えのよって生ずるところなり。身体髪膚はこれを父母に受けたり。あえてそこないやぶらざるは孝の始めなり。身を立て、道を行い、名を後世に揚げてもって父母を顕わすは孝の終わりなり」。

藤樹の「孝」の思想は、「孝」を宇宙的な原理として捉えようとした点に大きな特色があります。「万事万物のうちに孝の道理備わらざるなし。従つて人は天地の徳、万物の霊なる故に人の心身に孝の実体みな備わりたり。身を離れて孝なく、孝を



離れて身なき故に身を立て道を行うが孝行の綱領なり」。

フリートキングでは、日々の生活の中で教えをどう生かしていくか、等について毎回活発に議論しています。

「中江藤樹がいなかったら、明治維新は起きなかったかもしれない」と言われています。それほどの日本の誇り、郷土の誇りである中江藤樹について、皆さん、一緒に学びましょう。

六月十八日、安曇川公民館において、総会並びに研修会（講話）を、百三十名（内委任状百五十名）の参加を得て開催されました。（事務局）

平成二十九年 総会

川越清司会長の挨拶の後、深川澄雄さんが議長に選出され、議事に入りました。はじめに平成二十八年度の事業報告と決算報告並びに監査報告があり、承認されました。

平成 29 年度高島藤樹会



次に、定款52条の変更が承認されました。この件については、法の改正に伴い、この条文の後に「貸借対照表の公示をこの会のホームページに掲載する」旨を追加するものです。

続いて、報告事項である平成二十九年事業計画及び予算が報告されました。

今年度の主な活動予定

●心のセミナー開催

講演会（期日等未定）

●藤樹賞の選考と表彰

●講演・講話・指導活動（随時）

●論語素読教室（随時）

●教材の研究・開発

●紙芝居による啓発推進

●藤樹像制作に向けた調査

●藤樹人間学塾（毎月第一土曜日）

●藤樹さんに親しむ会（毎月第一日曜日）

●会報『高島藤樹会』の発行（年三回）

●「高島藤樹会」のホームページ更新（随時）

●小学校立志祭に啓発品贈呈（「五事を正す」クリアーホルダー）

●「中江藤樹DVD」等の販売

●大洲祭りでは高島市物産の販売

研修会（講話）

「論語に学ぶ『孝』の心」

講師 乾 進一 先生

●講話を拝聴して

総会にて論語に親しむ

川越 清司

総会後に、論語のお話を（株）パナソニックマーケティングスクール（旧称：松下幸之助商学院）商道科・論語講師の乾 進一先生をお迎えして、参加者一同が拝聴させていただきました。



さすがに商学院、パナソニックの販売店の後継者を育てる活学論語。章句に親しみながら意味や背景の説明を受け、生徒達とのやり取りを話されながら「孝」の基本を教えられています。特に商道と親孝行の実践的な（私が孝を学んだ受講生）とのお話は、親子でありながら仕事を通じて子供が成長していく姿を表現し、また親が子供に対して慈しみの心で対応する。まさしく活きた論語教室でした。

いつの時代にも普遍性を持っている孝や譲、謙虚、徳という言葉も行動も感じるのが少なくなってきたように感じます。経済最先の風潮の中で、パナソニックが道徳を全面に出し、社員やそのまわりの方が学んでおられることに敬服致します。講師のお話では、学院の生徒さん達は研修のために藤樹書院・記念館・神社・墓所・良知館を訪れるそうです。藤樹先生を通じて商学院や藤樹会のご縁が益々広がることを願います。

ひじりの声

上田藤市郎

台北の孔子廟に「有教無類」の巨大な文字が書かれている。論語の中の「子曰はく、教え有りて類無し。」である。様々な解釈がなされているが、教育によって人間に区別がなくなるという意味である。藤樹先生は江戸時代の初期に上小川の農村を、大洲では武士の社会をつぶさに見て行き着いた点は、人間本来の願いは「心の安楽」であり、「日々の健やかな生活子孫の繁栄と長寿」だとされた。武士の支配下にあった庶民にとって、天災、戦争、飢餓、病気、貧困からのストレスは過大であっただろう。先生はこれらを克服する根本は経済の発展も含めて、為政者、庶民の教育にあるという信念を抱かれたのであろう。

ただこの学びは、現代の高等教育が目指す知性や学力とは全く異なる。「子曰はく、過ちて改めず、是を過ちと謂う。」「上に居て驕らざれば、高けれども危うからず。」「法に非ざれば、言わず。言、天下に満ちて口過なく。」を根底に言行を身につけるとである。

一国の総理や大臣、議員と言え、高等教育を受け、品性を培った相当の人物でなければ務まらないと思われる。我が国の教育は、明治維新以後今もなお知育、学力偏重で、「有教無類」の成果をあげていないのである。

藤樹人間学塾： 藤樹思想を学び考え実践する

塾長 田中清行

「藤樹人間学塾」では、藤樹先生の著書を中心に藤樹思想を学ぶとともに、今日的意義を自分の頭で考え、仲間と議論しながら考えを深め、日々の生活の場で実践することを目的に毎月第一土曜日の午後、開催しています。本会報ではその模様をお伝えいたします。

五月六日（土）午後、第69回人間学塾を安曇川公民館で行いました。冒頭、童心塾と「まなざし」を紹介。「まなざし」で述べられている

「空とは何ぞや」の解説をし、私は廣瀬童心先生を師と仰いでいるが、学ぶ者は師を持つことが大事であると述べました。

そして『孝経』を素読後、『孝経啓蒙』の中の「五刑の章」と「要道（正しい道）を広める章」を学びました。概意は、五つの刑罰の種類は三千にも上るが、不孝以上の罪はない。人々に親愛の情を教えるには、孝の思想を教える以上のものはない……。

フリートークキングでは、日本には儒教の思想が深く入り込んでいる。上を敬うことは大事だが、上の考えを盲信するのは良くない。自ら判断できる見識を高めることが重要だという議論をしました。



六月三日（土）午後、第70回人間学塾を安曇川公民館で行いました。

冒頭、石田梅岩『都鄙問答』の中の「性理問答」の話を紹介しました。人の性は善か悪か。人の心は天とつながり、人の体は地とつながっている。心と身体をつないでいるのが呼吸（陰陽）。これを継ぐものが善。従って人の性は善であるという思想です。

『孝経』を素読後、『孝経啓蒙』の中の「広至徳（至徳を広める）章」を学びました。概意は、教養人が孝すなわち至徳を人々に教えるとき、内から湧き上がって外に溢れるようにして教える……。

フリートークキングでは、昔の人は聞いて覚えることが出来たが、現代

人は文字で覚えるので聞いて覚える力が弱くなったのではないか、などと話し合いました。

塾の後は、場所を替えて懇親会を楽しみました。

七月一日（土）午後、第71回人間学塾を安曇川公民館で行いました。

冒頭、孟子の言葉「養いて愛せざるは、これを豚として交わるなり。愛して敬せざるは、これを獣（けもの）として養うなり」を紹介しました。二千三百年前の先哲の言葉は現代にも通用します。

『孝経』を素読後、『孝経啓蒙』の中の「応感（応じ感ぜしむる）章」を学びました。概意は、古代の明王は、父母にお仕えして孝を尽くし天地と気持ちを通じた。父は天と繋がり母は地と繋がる……。

フリートークキングでは、現代社会の中にも親孝行や祖先の霊を大切にするとという考え方は残っている。しかし、多忙で複雑化する社会の中で「孝」の意識が薄れつつある。その結果、ストレスが充満する社会になっている。その解決のため古典に立ち返って、自分の生き方を見直す契機とすることが重要だ、などと話し合いました。

八月六日（日）午後、第72回人間学塾を安曇川公民館で行いました。

冒頭、七月に亡くなった中国の著作家、劉曉波氏は、ノーベル平和賞

を受賞しながら政府の反対で式に出られず、それでも彼は「私には敵はいない」という信条を持っていたのは覚者であった、その思想は藤樹や釈尊の教えにも通じるという話をしました。

『孝経』を素読後、『孝経啓蒙』の中の「広揚名（揚名を広むる）章」を学びました。概意は、教養人が至徳にしたがって孝の実践をすることにより名声が遠くまで、後世にまで伝播する……。

フリートークキングでは、外国人が奇異に感じる、日本人が修身等を大切にしている行動は儒教や仏教が浸透していることによる、それが日本の文化であるが若者には薄れている、などと話し合いました。

本塾には、新しく参加される方が徐々に増えています。「学ぶは楽し」。皆さまのご参加をお待ちしています。

「藤樹人間学塾 今後の予定」

◎ 九月二日（土） 十月七日（土）

十一月四日（土）◎ 十二月二日（土）

一月六日（土） 二月三日（土）

◎ 三月三日（土）

◇ 時間 十五時～十七時

◇ 場所 安曇川公民館

◇ ◎印は塾終了後、別場所で開催あり

「藤樹紙芝居」の紹介⑧

『遺徳を守る人々』

(解説)

この「遺徳を守る人々」の紙芝居は、二つの話を中心に構成しました。前半の話は、一人の武士が先生のお墓を参拝したいとして、立ち寄った時の話で、藤樹先生が亡くなられてから百八十年あまり過ぎたころの話です。

農作業を中断してまで、自宅へ戻り、汚れた野良着を、新しい着物と羽織に着かえ、墓地まで親切に案内してくれる農夫の温かい姿に心打たれる武士の話です。この武士こそ、藤樹先生や大塩平八郎に関する文献をもとに考えると、陽明学を深く学び、広く伝えたといわれる「大塩平八郎」であったと思われます。藤樹先生が亡くなられた後も、先生を敬う心や良知の教えが村人の中に深く根付いていることに感銘したと伝えられています。

後半の話は、小川村の大火という不幸な出来事が起きた時のことです。火事が起きたとき、村人たちは我が家より先に、書院の大切な書籍や物品を、力を合わせて無事に運び出しました。村の家の約半数を焼失したこの大火は、藤樹書院にも及んで、全焼したのです。村人の献身的な力がなかったら、何も残らなかった



たこと
でしょ
う。

地元
の人々
の手に
より、
いつも
美しく
掃き清
められ
た書院、

季節の花々が添えられている墓所、清く流れる小川とともに、長く伝えられた良知の心は、引き継がれ、今も守り続けられています。

この話は、藤樹先生に関する伝え話(口碑伝説)の一つです。

先生は自ら「陰徳」の精神を実践し、村人たちにも夜講釈等で、「人に知られない善行の大切さ」を教えました。

(紙芝居)

① 中江藤樹先生が亡くなられてから、百八十年あまりあとのお話です。一人の武士が、遠くから琵琶湖の西近江路へ、旅をした時のことです。武士『この辺りが、昔、中江藤樹先生という方が、おられたところだな。』

と、あたりを見回しながら、ひとり言を言いました。

武士『ようやく、ここまで来ることができた。是非とも中江藤樹先生のお墓をお参りしたいな。』と、大きな街道から横道に入りました。

② 武士『藤樹先生のお墓は、たしか小川村だったな。』

しばらく歩いていくと、畑仕事をしている、村人に出会いました。

武士『そうだ、あの村人に聞いてみよう。』

武士は近くまでいくと、武士「ちよつと聞きたいことがあるのだが。」と、声をかけました。



村人「はい、私です。」

村人は手を止めて振り向き、その手は泥で汚れ、継ぎはぎで直してある仕事

着にも、泥が付いています。村人「何かご用ですか。」

武士から声をかけられた村人が、恐る恐るたずねました。

武士「手を止めてすまん。じつはこの辺りに、中江藤樹先生のお墓

があるって聞いているのだが、知らぬかな。」

それを聞いた村人は、急にしゃんと、背中をのばして言いました。

村人「藤樹さんのお墓でしたら、存じております。私がお案内いたしますよう。」

村人が、先に立って歩き出しました。

③ 途中で、小さな農家の前まで来ると、

村人「少しの間、お待ちください。」

村人は、家の中へ入っていきまし



た。間もなく出てきた村人は、汚れた顔や手をきれいに洗って新しい着物と羽織に着かえていました。

村人「大変お待たせいたしました。」

武士に一礼をして、また、先に立って歩き出しました。

武士『うむ、さてさて、これはまたなんという男だ、着物まで着かえなくても、道さえ教えてくれたらよいものを...』

と、思いながらついでいくと、間

もなくお墓につきました。

④ 村人「こちらでございます。」

村人は、竹のとびらを開いて、

村人「どうぞ、お入りになってお参りください。」

と、言つて自分は外で、ひざをつ

いて深々と礼をしています。

それを見た武士は、おどろきま

した。

武士『そうか、着物を着かえたのは、私のためではなく、藤樹先生を敬つてのことだったのか。』



武士は、心の中でとても恥ずかしくなりまし

た。武士は竹で囲まれた中へ

入り、藤樹先生のお墓に心静かに手を合せてお参りをしました。

⑤ お参りが終わると、武士が村人に、たずねました。

武士「そなたは着物まで着かえて案内してくれたが、藤樹先生の親せきの方かな。」

村人は手を振つて言いました。

村人「いいえ、私は親せきではあ



りません。汚れた着物で藤樹さんのお墓へ行くけません。昔からみんな藤樹さんにはいろんなことを教

えていた

だき、お世話になっていましたから。しかし、藤樹さんを敬うものは、私だけではありません。この村の者は一人残らず、みんな先生を敬っています。」

村人は続けて言いました。村人「親を大事にして、兄弟仲良く、平和に暮らすことの大切さを知つたのは、藤樹さんのおかげなんです。だからいつも感謝しなければいけない」と、私の親も、常

日頃から言つて聞かせてくれました。」

と、答えました。

⑥ 武士は、初めはただ、藤樹先生のお墓をお参りしたいぐらいに思っていたのですが、村人の様子を見て、武士はもう一度いいねにお参りをしました。

武士「世間では、先生のことを、近江聖人と言っているが、本当の



聖人だということが、今、ようやくわかりました。よく案内してくれました。本当にありがとうございます。

ざいました。」

武士は村人に対して、お礼を言いました。

村人「ようこそ、お参りくださいました。どうぞ、気をつけて、旅を続けください。」

武士は、もう一度いいねに礼をすると帰っていききました。

⑦ 今日も小川村の人たちは、書院やお墓のお掃除をしています。



キク「昨日の風で、今朝は藤樹さんの書院の庭に落ち葉がたくさん落ちてきたので、お掃除に来たんですよ。」

キクさんがほうきで落ち葉を掃きながら、後からやってきた清助さんに言いました。

清助「それはご苦労さんです。私もこれから藤樹さんのお墓に。せつ

かくきれいなお花をかざつてもらったのに、竹の囲いがだいぶ傷んできたので。ちよつと、竹やぶで竹を切つてきて、直そうと思つて

いるんですよ。」

と、言つて清助さんは、竹を取り出かけました。

このように、藤樹先生が亡くなられてからも、小川村の人たちは、藤樹書院や、お墓のお世話を喜んでしていました。

⑧ 武士がお墓参りをしてから、五十年ほど過ぎた、明治十三年（一八八〇年）九月二十六日の夜、カーン！カーン！カーン！カーン！

小川村で火事を知らせる半鐘が、激しく鳴り響きました。村人たちは



はおどろいて、家の中から外へ飛び出しました。すると、強い風の中、火事で空が真っ赤に染まっています。

村人「火事だー、火事だー、」
と、叫ぶ大声が聞こえます。

大変です。村の中が火の海になって、音を立てて燃え盛っています。村人たちは、火の見える方へ、火消道具を持って走っていきます。

その時です。みんなが口々に叫びました。

村人「おーい、藤樹さんの家が危ないぞー。みんな早く行って大事なものを全部出すんだー。」

自分の家にも火が近づいたり、燃えたりしているのかまわずに、おぜいの村人が、書院の方へ走り出しました。

⑨ 火事は強い風にあおられて、どんどん広がりを見せています。藤樹書院にも火の粉が飛んできて、いつ燃え移るか危険な状態になって来ています。村人たちは、火の粉が飛び交う中で、頭から水をかぶって、



次々と書院の中へ飛び込みました。

巳之吉

「おー

い、早くこれを

を出す

んだ。」

五助「暗いから、

気をつけるよー。危ないぞー。」

みんなで声をかけ合いながら、次々と藤樹先生の残された大事な書物や遺品を運び出しました。

ようやく、すべての物を運び出したとき、書院にも火が移り、大きな炎に包まれ、燃えてしまいました。

⑩ 朝になって、ようやく火が消えたときには、小川村の半分以上の家が燃えてしまっ、大火事となっていたのでした。

家が燃えて、村人たちは住む家もなくなり、途方に暮れてしまいました。

五平「みんな、家も何もかもなくなっ



てしも

うた。

明日か

らどう

したら

らええ

んやろ

か。」

火事さ

わぎで、

破れてし

まった着

物に、スズで黒くなった顔を、お互いに見合わせました。

兵七「でもな、藤樹さんの大事なも

のは、みんなで運び出せてよかつ

たなー。きつと、藤樹さんも喜

んでくださってるよ。あしたか

ら、また、みんなで助け合ってが
んばろうよ。」

兵七さんが、汚れた顔に涙を浮かべながら、みんなに声をかけました。

三吉「そうだ、そうだ。火事で亡くなった人は一人もないし、もう一度、みんなで一一緒に頑張ろう。」

そして、藤樹さんの書院も、もう一度立派なものを建てるんや。」
三吉さんも、みんなを励まして言いました。

みんな「ようし、わしらもがんばるでー。みんなで力を合わせて自分らの家も、藤樹さんの家も、建てるんやー。みんなでがんばろう。」

「おー。」

みんなの力強い大きな声が、小川村中にひびき渡りました。

⑪ 小川村の大火事から二年後、藤樹先生が亡くなられてから二百三十四年経った、明治十五年

(一八八二年) 小川村の人たちや、

近隣の多くの人たちの力によって、

再び、新しい藤樹書院の、立派な建

物が完成しました。

兵七「みんなよかったなー。多くの

皆さんのおかげで、立派な藤樹書

院が建ったよ。これから、みん

なで仲良く、しっかりと藤樹先生

の教えをみんなに伝えながら、書

院やお墓を守っていこう。」

小川村の人たちの顔が笑顔で生き生きとしていました。



藤樹書

院が新し

くなって

百三十年

年あまり

過ぎまし

た。今日

も藤樹書

院や先生

のお墓は

上小川の

人々の手

により、きれいにお掃除がされ、お花も飾られ、清く流れる小川とともに美しく守られて、藤樹先生を慕って訪れる、多くの人たちを迎えています。その陰には、藤樹先生の教えを、親から子へ、子から孫へと代々伝えつないで、今に至っている上小川の人たちを忘れてはいけません。

(おしまい)

今回の紙芝居は、「うそはつけぬ」を予定していましたが、紙面の都合等で「遺徳を守る人々」の紙芝居の紹介となりました。

(広報委員会)



郷里に関西一に分教場を寄付

『大谷仁兵衛』

(広報委員会)

▲大谷仁兵衛(おおたににへい)氏は、慶応元年(一八六五年)近江高島郡三谷村(現滋賀県高島市今津町棕川)に栗田長五郎の三男として生まれました。幼名を捨吉と言ひ、明治十三年(一八八〇年)、京都の出版書店『大谷屋』に奉公に出ました。

明治二十八年(一八九五年)才覚と人物を認められ大谷家に入籍し、名を大谷仁兵衛と改めました。明治三十五年(一九〇二年)には経営不振に陥っていた『帝国地方行政学会』(現株式会社ぎょうせい)を継承し、同社で我が国で初の加除式法規集を発売し『法規全書』を出版しました。



大谷仁兵衛氏(『区誌 棕川』より)

その後『内外出版会』・『東西医学社』・『帝国法規出版』などを創立。また印刷技師であった杉本京太に資金支援を行い和文タイプライターが開発されると、翌年特許を取得の上、大正六年(一九一七年)自ら社長となり資本金三十万円で東京市京橋区(現東京都中央区京橋)に日本タイプライター株式会社(昭和六十年(一九八五年)キヤノンが資本参加。現キヤノン・エヌ・ティイー・シー株式会社)を設立しました。

昭和三十一年(一八五六年)に、九十二歳で亡くなっています。

(参考:『ウィキペディア』)

▲成功をおさめた大谷仁兵衛氏が、自分の出身地である棕川の学校の荒廃が激しく、新築の必要があるなかで、村が資金不足に悩んでいることを伝え聞き、学校建設費用の寄付を申し出ました。

大正十一年(一九二二年)十二月、現在の棕川分校敷地に完成した校舎は、鉄筋ブロック銅板ふき耐震耐火構造で、普通教室のほか、特別室・裁縫室・応接室・事務室・図書室・会議室・雨天体操場・水道設備などを備え、この当時としては県下でも他に類を見ないほどの充実したものでした。

(参考:『広報たかしま』)

▲大谷仁兵衛氏とこの分教場建築のことについて、澤田純三氏が『区誌 棕川』の中で、次のように記されています。

す。

『……山裾に学校が建ったのは、捨七が十歳の時(明治十年)であった。弟の身で行く末を案じていた矢先に、学んだ「無学而不成(ガクナクシテナラズ)」の一語は、脳裏に深く染みこんでいった。

京都の四大書肆(しよし)に数えられた大谷家で働き始めたころ、故郷の学校が焼けたり教員が来ないなどの話を耳にして、歯きしりをしたに違いない。

大谷氏が東京の業界に雄飛すること三十年、父祖の地に報恩するには学校に如かずと、棕川学校の新築案を村に諮ったのは大正八年(一九一九年)のことであった。

当時二十四歳の青年であった私の父は「年代記」の中で、大正十年の棕川区の移ろいを

「学校狭クシテ増築ヲ要スルトハ数年前ヨリ言イ居ル所ナルガ 金員ヲ要スル問題トテ今日尚其俛ナリキ、然ルニ此度大谷仁兵衛氏ノ提案ニテ小谷口上ノ丘ニ新築セヨ費用ノ大部分ヲ補助スルトノ申出ニ

当区民相談シ直ニ之ニ応ジタリキ

初メ大谷氏ハ木造校舎ノ計画ニテ当区民モ亦(また)之レガ用材ヲ集ムルニ意ヲ用ヒタリ、然ルニ大谷氏ノ心変リテ洋館建ノ校舎ノ必要ヲ説カレ(略)……大正十年七月二十四日地鎮祭ヲ行ヒ直チニ工事ニ着手セラレタリ

……(略)……

校舎と不老閣の新築竣工式は、大正十一年(一九二二年)十二月十三日に執行され、高島郡長をはじめ郡会議員の多数の来賓を招いて、洋風・上下水道完備の新校舎が披露された。……十三万余円の巨費を投じて前後三年に及んで竣工した分教場は、鉄筋コンクリート造り銅板葺きという滋賀県下にまいったく例を見ない洋館建てであった。……

洋風校舎を新築する決断を下した大谷氏には「教育の成果を期するにはよき教員を得るに如かず」という深謀があつて、校地続きの一段高い展望の佳い所に、堂々たる和風の教員住宅も建てられたのである。大谷氏は「漢学」を愛し、老子の谷神不老の語に惹かれて、棕川校の敷地一帯を財団法人不老會の所有地と登記してその事務所を棕川校の教員住宅の棟続きに設置した。



校舎お別れ会 S53(『区誌 棕川』より)

また、この丘に上る凡そ三百メートルの道路に架かる橋には、不老橋の銘版をはめ込んで、谷神不老の信條を吐露したのである。』

良知館通信 ⑥

儒式祭典

山本 義雄

儒式祭典は毎年九月二十五日に、わが国では珍しい文公家礼（宋の時代に書かれた儒家の礼儀作法の本）により厳粛に執り行われる。



藤樹先生の命日は八月二十五日で、明治の初めまではこの日に行われていた。明治になって暦が太陽暦に改められたり、生徒たちが参拝するよう

になって、明治十一年（一八七八）から九月二十五日に例祭が行われるようになったと記録にある。

儒教における「死」は、肉体の呼吸停止が始まる（心臓死を意味）と一致していた魂（こん）と魄（はく）とが分離し、魂は天上に魄は地下へと行く。これが死である。礼制として三年の喪というものがある。（論語の陽貨編にあり）三年の実態は二十五ヶ月である。その二十五ヶ月

月とは足かけであるから満二年プラス一日のことである。儒教では、死後の日数の数え方は死の前日から数える。（礼記、曲礼上編）三年の喪とは、満二年目の忌日ということを決して満三年ではない。仏教もこの数え方を取り入れている。

藤樹全集によると、延享四年（一七四七）藤樹先生百年祭を修む。寛政九年（一七九七）藤樹先生百五十年祭を修む。光格天皇から「徳本堂」の堂号を賜る。明治維新忽忙の際にあつても藤樹先生に対する敬虔の念、少しも変わることなく祭祀執り行われた。明治三十年（一八九七）藤樹先生二百五十年祭修む。



藤樹先生二百五十年祭式

右百五十年及二百年度の儀式を遵守するに其裝飾舗設作法細部等詳かならず因て今、京都明倫舎の恒式を酌量し以て草するものなり但饌品に至りては時宜に従ひ国禮に拠ると云う。明治三十年八月出雲路興通とある。二百五十年祭より、口伝から現在行われている祭式が定まった。又本年は三百七十年祭となる。

賛助会員一覧

新規賛助会員

- 川島酒造株式会社（新旭町旭）
ご協力ありがとうございます
- ウェストレイクホテル可以登楼
- 株式会社 大山建設
- 株式会社 桑原組
- 有限会社 宏和商事
- 税理士法人・小畑会計事務所
- 有限会社 白浜荘
- 社会福祉法人 新旭みのり会
- ソエダ 株式会社
- 株式会社 TADコーポレーション
- 鉄屋商事 株式会社
- 株式会社 戸井薬局
- とも栄 藤樹街道本店
- 中村印刷 株式会社
- 株式会社 中村測量設計
- ニッケイ工業 株式会社
- 八田建設 株式会社
- 有限会社 馬場塗装
- 三田村印刷 株式会社
- 有限会社 綿庄食品店

（五十音順）

あとがき

縄文杉の生命力はどこから？

八月にNHKの「大捜索ドキュメント！屋久島伝説の超巨大杉」を見ました。世界遺産・屋久島の象徴である所謂「縄文杉」。それに勝る未発見の超巨大杉を最新科学で捜すというものです。この番組の中で、気になったお話がありました。

岩の上に覆いかぶさるように生える屋久杉を見ながら、新潟大学教授崎尾均さんが語られました。「土壌がないから成長がうんと遅い」「その遅いのが逆に年輪が緻密になって腐りにくい幹を作る」と。

特に「縄文杉」は、高さ約二十五m、幹周十六m、推定樹齢二千〜七千二百年とのことです。七千二百年、この地球上で一個体がこれだけ長く生き延びてきた例は、他にないでしょう。縄文の時代から現代まで生き通すというものです。その生命力はどこから来るのでしょうか。

普通、堆積や浸食等をくり返す地表が、数千年も杉を支えられません。地表が変わりにくい岩から成る屋久島では、杉は養分を求めて岩のあらゆる隙間に根を張りめぐらせ、じつくり緻密な年輪を刻みます。毎年、夏の暑さと湿気と数々の台風に耐えて、一段と「根」を張り続けます。人間にとっての「根」とは何でしょうか。（H・M）